

船の事安村が子に還し付られて、運上の事免除せられ、龍田の社修造の事、怠慢なかるべきよし、
仰下されたりけり、

〔和漢船用集舟名數海船〕磯場イサハ 小船にして、磯邊を行の義、磯場舟なり、磯廻舟とも書べし、

〔倭訓栞前編三十三〕も。か。り。ぶ。ね。 藻を刈の舟也、玉もかり船も同じ、

〔萬葉集七〕羈旅作

藻モ刈カリ舟フネ奥オキ榜ホ來ク良ラ之シ妹イモ之ガ島シマ形カタ見ミ之ノ浦ウラ爾ニ鶴ツル翔カケル所トコロ見ミユ

磯立奥邊乎見者、海藻刈舟、海人榜出良之、鴨翔所見、

〔拾遺和歌集八〕題しらす

よみ人しらす

もかり舟いまぞなぎさにきよすなるみぎはのたづも聲さはぐなり

〔萬代和歌集十三〕寄船戀を

民部卿典侍

にこり江にうき身こがる、もかり舟はてはゆき、のかげだにもみず

〔新千載和歌集十五〕戀の歌の中に

前大納言爲世

おなじ江のあし。か。り。を。舟。を。し。返。し。さ。の。み。は。い。か。う。き。に。こ。が。れ。ん

〔倭訓栞中編十二〕せきぶね 關舟の名は、凡百有餘年にして、古へ高尾舟といひし、萬葉集に、八十

梶かけとよむも是なり

〔和漢船用集舟名數海船〕關船 舟方言に曰、關は城塞門也、又要會の乗船也、此故に名付、又曰、四十

挺立以下、矢倉なき者は、是を小早と云、四十挺立以上、矢倉ある者は、是を關と云、關船と稱すること、凡

百有餘年のことにして、古は高尾船と云し也、其制、頭底尾高きものなり、はや舟と云は、歌にも多

く讀て、古今の通名なり、關船の名、船法の卷、又は舟法要略に載たり、其外是を見ず、如泉が誹諧す

り、火燧といふものに、せき舟の名を出せり、今關と云て通用する者也、